世界は今日も晴れ

華淋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界は今日も晴れ

【Ｎコード】
Ｎ０１２４ＢＡ

【作者名】
華淋

【あらすじ】
何の変哲もない女子大学生、神田　怜。
只今お仕事探し中の彼女が見つけたのは、お手伝いさん兼マネージャーという住み込みの仕事。この際住み込みでも…と申し込んでみると、見事採用！彼女を巻き込んだ新しい生活が始まります。
更新は多分早めです。

始めに（前書き）

この小説の説明（？）ですー。

始めに

主人公は只今お仕事探し中の神田（かんだ）　怜（れん）。彼女は、何の変哲もないただの女子大学生です。
ある日見つけたのは、お手伝いさん兼マネージャーという住み込みの仕事。この際住み込みでも…という感じで申し込んでみると、見事採用！しかもその家は我らが祖国、日本さんの家だった――――

初投稿ですが、こんな感じで進めていきます↑
グダグダなところも皆様のスルースキルでスルーして下さいまし。
話が進むにつれて多分全キャラ出てきます。

始めに（後書き）

こんな感じです。
次は多分本編。

お仕事ないかな（前書き）

此処から本編ですよ！

お仕事ないかな

「はぁ…」

ため息つくと幸せが逃げるって言うけど、そんなのもう関係ないよね。

私、神田　怜です。
趣味はパソコンいじること、特技は現実逃避。何か嫌なことがあるとすぐに頭の中は二次元に行ってしまう女子大生です。俗にいうオタクです。そして物凄くあがり症。

そんな私が何故ため息を吐いたかというと、今日のバイトの面接に失敗したからですよ！
なんだよ！名前を聞かれて生年月日答える馬鹿が何処にいるんだよ！此処にいたよ馬鹿！！緊張し過ぎだよぉ…

そんな感じで今、へこみながら帰宅中です。

「あー…私でも出来るような仕事とかないかなぁ…」

接客業じゃない仕事の方が良いよね、相手のためにも。

トボトボと肩をおとして帰路についていると、家の近くまで来ていることに気づいた。

決めた、家に帰ったらパソコンする。もう決めたもんね。大学の課

題なんて知るもんか。

そこまで考えた時、ふと電柱に貼ってある貼り紙に目がいった。
あれ？こんな所に紙なんて貼ってあったっけ？

「――…お手伝いさん…？」

そこに書いてあったのはお手伝いさん兼マネージャーのお仕事。お手伝いさんかぁ…掃除したりお茶出ししたりするのかな？それなら出来る気もするけど…

「でも住み込み…」

だって住み込みってあれでしょ？同じ家に住んで働くんでしょ？なんかちょっと気を使う事とか多くなるんでしょ？でしょでしょでしょ？

「まぁでも、申し込んでみるか！」

紙に書いてある電話番号を素早くメモして、私はその場を後にした。

お仕事ないかな（後書き）

無駄に長くてすみませｒｙ

頑張りまする…

意外とあっさり

私は今、とある家の前にいます。昨日、貼り紙に書いてあった電話番号に連絡したら面接をするから、という事で教えてもらった住所が此処だった。ちなみに声は男の人でした。

その家はすごく…うん、

「……でっか…」

そうです、でかいんです。
それに昔ながらの家っていいますか、やたらと歴史の深そうな家なんです。
それになんかさっきからカコーンって音が聴こえて来ますよ！？あれって竹の中の水が落ちた時に鳴るやつですよね？そんなのもあるほどすごいお家なんですか！？

あぁぁー緊張してきた。どうしよう手汗すごい。

「…よしっ」

気を引き締め、いざインターホンを押す…押す、お、お、あれ？

インターホン無いし！！
どんだけ昔ながらなの！？まさかのノックしかないフラグ！？
内心えぇぇ…となりながらもノックをする。ちょっと待つと、中から男の人が出てきた。うわぁ綺麗な人！

「あの、どちら様ですか？」

「へぁっ！？あ、あの昨日電話した者です！」

しまったぁぁぁあ！思わず変な声が出てしまった！！私の馬鹿馬鹿馬鹿ぁ！！

すると男の人は、柔らかく微笑みを浮かべた。

「神田怜さんですね？お待ちしてましたよ」

その柔らかい笑顔に少し見とれていると、私にどうぞ、と家に入るように言ってくれた。

「お、お邪魔致します…」

私はおずおずと家に入っていった。

「日本茶で大丈夫でしたか？」

「あっ、はい、ありがとうございます…」

日本茶の入った湯呑み二つから、お茶の良い香りが漂ってくる。
さっき客間に案内された私は、最初はソワソワと落ち着かなかったが、お茶をいれてもらっている間に少し慣れてきた。

男の人が目の前に座る。いよいよ面接っぽい雰囲気になってきたので背筋をピッと伸ばす。

「えっと…自己紹介がまだでしたね。はじめまして、名を本田菊と申します。国は日本です。」

「ははははじめまして！私、か、神田怜と申します！……ってえ？国？」

出身って事かな？そりゃあこの人は日本人の中の日本人って感じはするけども。

「出身国って事ですか？」

「え？いや、私が日本です」

ええええ!?（;;、Д。、）

意外とあっさり（後書き）

やっぱり　な　が　い

次回に続きます。

まさかの…？（前書き）

あけましておめでとうございます！

今年からジャンジャン書きはじめますのでよろしくお願いしますー！！

まさかの…？

「く、国って国ですか？日本とかアメリカとか中国とかの国ですか！？」

「はい。神田さんが今おっしゃった国の方々もちゃんとおられますよ」

「そ、そうなんですか…」

なんかさっきから次元が違う気がする。はっ！これが擬人化というものか！？あまり興味深いジャンルではなかったからスルーしてたけど…！そうか、これが擬人化か…。

「まぁそれは置いといて、神田さんの事聞かせてください」

「あ、はい！」

そんなに微笑まれれば何も言えなくなっちゃうじゃないですか！笑顔が眩しいぜ…！！

「では神田さん、貴女の趣味はなんですか？」

「趣味…ですか」

パソコンいじることなんて言ったら即不採用だよね。
普通の人ってどういうことを趣味にしてるの？よくわかんない

「読書ですかね」

「どのような本を読むのですか？」

漫画とか同人誌です。

言えないっ！絶対言ってはいけないっっ！！しかしなんと答えれば…！

「文学とか…エッセイとかで…」

～♪～♪

「「？」」

～♪

……まさか…

～♪

私の携帯…

『みっくみっくにしーてあげるー♪』

「っ、ぎゃぁぁぁぁぁあ！！！」

あぁ、この仕事も駄目かもしれない☆

「……」

「……」

……気まずいっ！気まずいよぉぉ誰か助けて！！

マナーモードにするの忘れてた私の馬鹿！うわぁぁん私の馬鹿ぁぁぁあ！！！

なんかさっきから本田さんの目が恐いです！！なんで！？

「……今の…」

「はいいっ！」

「……初音ミクのですよね！？」

「……はい…？」

なんか本田さんの目がいきなり輝いた気がする…。
心なしか鼻息が荒い…興奮してる？
ひとまずは大丈夫だったっぽい、けど、

「は、はい…そうです…」

「ミクたそ好きですか！？」

「あ、そういう呼び方するってことは本田さんもお好きなんですか！？」

「大好きです！！」

二人でガシッと腕を組む。

ま　さ　か　の　！本田さんもこっち系の方だった！同士の匂いがする！！

二人で手を取り合っていると、本田さんはハッと気づいて私の手を離した。

「あ、すみません！少し興奮してしまいました…」

「え？あ、こちらこそすみません！」

私も手を引っ込める。

あー今さらになってちょっと恥ずかしさが出てきちゃったよ…。

すると本田さんは私の方に向き直り、にっこりと笑った。

「神田さん」

「はいっ」

「貴女を採用にします！」

…えっ？採用？

「えぇぇぇマジですか！？ありがとうございます！よろしくお願いします！！」

「はい、神田さんは私と気が合うようです。こちらこそよろしくお

願いします」

わーいお仕事見つかった！

まさかの…？（後書き）

やっと面接終わった…

次辺りに怜さんの外見とか書いてみようかな

設定（前書き）

怜さんの設定色々ですよー

設定

神田　怜（かんだ　れん）

２０歳　短大の2年生

趣味はパソコンいじること。ミクは永遠（とわ）の俺の嫁と言い張る。

普段はあがり症であまり人うまく喋れない。しかもどもりやすい。

しかし一旦慣れると少しずつだが喋りやすくなる。

家にある漫画や同人誌の量は広い部屋の約五分の四を占める程ある。

漫画７：同人誌３くらい

腐ってます。

外見

黒髪で染めてない。背中くらいまである髪の毛を頭の後ろでおだんごにしています。

目はちょっとだけつりめ、ぱっちり二重瞼。

年齢より下に見られる。

童顔、身長が１５６ｃｍ。

設定（後書き）

こんな感じ。

後から付け足したりするかも↑

お母さんみたい（前書き）

引っ越して来ました。

お母さんみたい

私は今、とある家の中にいます。

あれ？なんかデジャヴ？

なんでかと言いますと、

「――――…フゥ、大分片付きました。ありがとうございます」

タオルで額の汗を拭う。ずっと前屈みだったから腰が痛くなっちゃった。

今日、私は本田さんの家に引っ越して来ました。

この前採用と言われてから、一応大学の事を話してみたら

『此処から通えば良いではありませんか。私の家から近いですし』

と言って下さり、私は住み込みで働くことに決まりました。

「ではお茶をいれましょうか。終わったら居間に来て下さい」

「はい！ありがとうございます！」

あー本田さん優しいなぁ。

本当は私がやらないといけない仕事なのに…。まさに日本人の鏡！

あ、日本だからか。

残りの小物を片付け、二階の私の部屋から一階の居間に下りる。…

…ちょっと階段がギシギシ鳴って恐いけどね。

居間に入ると、本田さんはお茶とお菓子を用意してくれていた。う

わーようかん美味しそう。

「あっ…すみません本田さん、お菓子まで…」

「あぁ、良いんですよ、ちょうど八つ時でしたので」

そういって微笑む本田さんは、すごく綺麗でした。

なんかお母さんみたいだな…。

「いただきます！」

そういって食べたようかんはやっぱり美味しかったです。

お母さんみたい（後書き）

今回はいつもより短めに出来たはず…！

二次元行きたい。

お買い物（前書き）

今回、本田さんキャラ崩壊注意報発令中ですw↑

お買い物

本田さんの家に来てから、一週間程たった。
今日は日曜日、時はお昼時。お昼時とは言っても、もうお昼ご飯は食べてしまいました。
掃除も片付けも終わり、今は庭の池の近くでぽち君と戯れています。

「おーよしよし、ぽち君は可愛いですなぁー」

頭や体を撫でると、ぽち君は気持ちよさそうに目をつぶる。
その様子が可愛くて、思わずテンションがヒートアップしてしまった。

「うひぃぃぃ可愛いなぁ可愛いなぁぽち君！あぁ君は本っ当に可愛い！」

ギュッと抱き着いてスリスリする。
ぽち君が驚いてちょっと逃げようとするが、私も負けじと腕の力を少し強くした。

「神田さん」

「はいいいい！？」

驚いて思い切り振り返ると、いつの間にか後ろにいた本田さんが目に入った。

あぁぁぁぁあ今の見られた！絶対見られたぁぁぁあ！！恥ずかしい！今なら死ねる！！

「ほっ、ほほほ本田さん、お仕事は終わったんですか？」

「はい、ついさっき」

「そ、そうですか…」

にっこり笑って答える本田さんに、もう涙と羞恥しか出てこなかった。

「そうでした神田さん、この辺りの案内も兼ねて買い物に行きませんか？」

「買い物ですか？」

話を変えるようにふられたその提案に少しだけ考えた。

案内…そうだよなぁ、この辺りとかよく知らないもんね。これから

お手伝いさんをやっていくうえで場所とか分からないと駄目だよね。

「はい、行きます」

ということでスーパーに買い物しに行くことしました。

本田さんにあちらこちらと案内をしていただいて、お目当てのスーパーに到着した。
今日の食事当番は私だったので、冷蔵庫の中身を思い出しながら野菜やら魚やらをかごの中に入れていく。

あとは何が足りないかな、などと考えていると、本田さんが隣にいない事に気づいた。

「（まぁ、迷子にはなりませんよね）」

そう思った次の瞬間、いきなりかごが重くなった。

ちょっと戸惑いつつ隣をみると本田さんの姿。しかも顔がなんか爽やかで、笑顔が眩しい。

「いやぁ、そろそろなくなりそうでしたので」

そう言った本田さんから目線をかごに移すと、塩の袋が五つ。あれ？塩って家にまだ一袋あったような…。

「本田さん、塩はまだあと一袋ありますよ。…というか五袋は多いです。戻してきて下さい。」

そういった直後、笑顔だったはずの本田さんは地球が滅亡する時のような顔になった。
少しびっくりしてしまいました…。

「しっ塩がなかったら…なな何を食べて生きていけば良いのですか！？」

「いや、普通に野菜とか…」

「もっともな正論ですがそれは却下に致します！」

「はぁ！？」

この人はっ…！こんなに塩を食べてたら高血圧になりますよ！

「とにかく戻してきて下さい。家に一袋ありますから！」

すると本田さんはうなだれ、かごに入っている塩達を抱えて元の場

所に戻しに行った。背中からかなり哀愁が漂っていた。

あれー？本田さんってこういう人だった？この前お母さんみたいって思った本田さんは何処に行ったの？

その後私は会計を済まし、今だにへこんでいる本田さんと一緒に家へ帰って行った。

お買い物（後書き）

……はいっ！

今回は謝ることしかできません。

恐れ入りますすみませーん☆

お客様です！（前書き）

新キャラ登場です！

お客様です！

「、ふぁ～……」

堪えようと思ったけどやっぱり出てしまいました。

おはようございます、神田怜です。

今日は大学に行く日なので、早めに起きてきました。

私は低血圧なので朝は辛いです…。

「本田さん、おふぁようございます…」

「あぁ、おはようございます。神田さん」

今日の食事当番は本田さんなので、本田さんは先に起きてました。

しかも私のお弁当まで作っていただいてます。ありがたいです！

コン、コン、コン

「…あれ、誰か来たみたいですよ？」

「……そうみたいですね…すみません、手が離せないので出ていただけますか？」

「あ、はい」

急いで玄関に行く。私あがり症だから出るの苦手なんだよね…。

今開けまーすと声をかけ、ドアを開けるとそこにいたのは、

「チャオ！にほ……あれ？日本じゃない！君可愛いね、俺とお茶しない？」

「こらイタリア！いきなりナンパするな！！」

「ヴェッ、痛いよ～…」

「え、え？あ、ああのっ…」

「あーすまない、日本はいるか？」

「え、あ、はい！只今！」

急いでさっき来た廊下を戻っていく。あーびっくりした…。

台所に行き、本田さんを呼ぶ。

「あの、本田さん。お客様です」

「客？……あぁ、ドイツさんやイタリア君ですかね。神田さん、火加減をみてて下さい」

「はいっ」

そう言って本田さんは、玄関の方へ向かった。

玄関の方で少し話し声が聞こた後、本田さんが戻ってきました。

「本田さん、えっと…あの方達は…」

「彼らは私と同じように、国である方々なんですよ。…さぁ、居間にあがっていただいたので一緒に朝食をいただきましょう！」

「は、はい！」

よいしょ、と炊飯器を持ち上げる本田さん。え、それ居間に持って行くんですか？

急いでお弁当を包んでしまい、食器棚から人数分の茶碗を出す。

というかなんでこんなに茶碗や皿があるんだろう。私が来るまでは本田さんも一人暮らしだったらしいのに。

「神田さん？」

「はいっ只今準備します！」

茶碗と皿とコップをお盆で持ち、本田さんの後に着いて行った。

お客様です！（後書き）

やっぱり文章書くの難しい…。

次回に続きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0124ba/

世界は今日も晴れ

2012年1月2日07時45分発行